

# 能率問題と組織問題

オプスター 星 一

今日では我が日本も既に能率問題に目醒て来て仕事を「速く良くしやうと努めるやうになつたのは誠に喜ばしい事である。人間の一生は學理的に百廿五歳まで生き得ると云はれても七十は古來稀なり、百歳以上の壽命を保つことは餘程體質の良い衛生家でなければ求め得られない此の短かい人生に於て、半分は寝て過し後の半分は何とかやらして過すと下世話にもある通り働く期間といふものは眞に短い。其の短い期間に於て仕事をしやうといふには一切の無駄を省いて能率的に働かねば何事も出来るものでない。これが謂はゆる醉生無死と有意義の生活との歧れるところである。況んや今日は世界の生存努力猛烈を極め、而して歐米各國は科學上から能率問題を研究し、これ

を實地に應用することに抜目がないと言はれてゐる位であるから、非能率的なことをやつたのでは生存権さへも奪はれることになるのである。唯だ、これに就て、大いに注意せなければならぬことは、何が何であらうと此の世の中で人間ほど一番貴重なものはない

## 劍道 上の原氏の虚

東京帝大 劍道教師 木下壽徳

彼の中間某なる一少年は別に劍道の鍛練を受けた経験もないのに、どうして一撃の下に宰相を刺し得たかといふことに就て、彼れ中間は轉轍手である、半生線路に立ちて轉轍の業に従ふたので右腕の背刀目から養はれ、以て深く宰相の心腹を貫き得たのであると云ふ者がある。彼にはそれだけの力があつたか知れないが又一方新聞紙に傳へられた遺難當時の情況から推測すると、餘人は知らず吾々劍客の眼から視て、ヤツと打

といふことである。人間あつての能率問題だ。ところが歐米の能率論者は動もすれば餘りに能率といふことに重きを置いて而して人間を輕んずるといふ傾きがある。切言すれば能率問題の爲めに人間を機械化して了う弊があるのである、これがそもそもの勞資爭議をして絶えざらしめる禍因ではなからうか。そこで此の弊を矯め、且つ人間としての能率を發揮せしめる言ひ換えれば皆を生き甲斐

込むだけの虚が、原氏の身體の前後左右に開かれて少しも實がなかつた。其の虚が偶々全くの素人である中間某の眼にさへも映じて、電光石火の如く彼を殺意を進行すべく衝動させて、氣合の瞬間に起る偉大な力に身體の重量が加はり、萬餘の石でも倒れ掛るやうなはずみで突き込んだから、一撃の下に容易に相手を斃すことが出来た。此の時の中間某は、全く無念無想の境に在つたもので、無念無想の境に在る刀は、

ある人間として働かしめやうとするには、第一に其の組織體制を良くせねばなるまいと思ふ。古人の言葉に「天何をか言はんや、四時行はれ、萬物生ず、天何をか言はんや」とある。天言はずして四時成り、而して萬物をして各々性命を正しうせしめる所以のものは、又其の組織體制が良いからであらうと思ふ。自分は廣く學者の説をも聽いて見て歐米に優る良い組織を案出し度いと心掛けてゐる。

少くも對等の妙を會得したものでなければ、遂に避けることが出来ない、少しでも虚があつては、事既に終れり矣だ、況んや油斷も甚だしく此の警戒もなきに於てをやだ、今回の凶變は斯くの如くして起つたのであるが、返す／＼も残念なことであつた。或は之れを政治や社會の罪に歸せんとするものがあるが、是等の缺陷は常に存して絶ゆるものでないから、後世の宰相たるもの乃至一般の人々も身に慮を拵へないやう相傳へて特に警めねばならぬ事柄である。災害は多く油斷から生ずるものだ。而して劍道の奥義も亦油斷しないことにある。(文責記者)

新思想の流

大なる新思想の先驅者たるか、野くと

古今東西